

# 幻灯画像史料の保存と活用について

## 日本力行会所蔵史料を中心として

和田 敦彦

(信州大学人文学部)

### 1. 幻灯画像史料について

ここでは幻灯画像史料について、現在の研究の現状についてふれるとともに、具体的な調査や保存の方法、及びその意義について考えることとする。まずこの節では、幻灯という文化自体をどうとらえるか、についてこの問題についてのいくつかの研究にふれつつ、論者自身の考えを提示しておきたい。

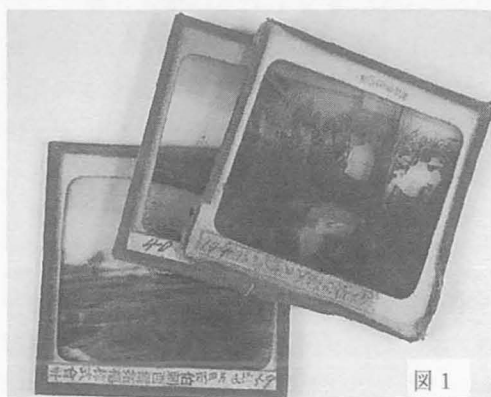


図 1

次節以降で、具体的な保存や展示の事例にふれつつ、どのような形での保存、目録化、展示がのぞましいのかについて検討することとした。そのうえで、第3節から、現在調査中の幻灯史料について述べるとともに、その幻灯史料に基づきつつ、望ましい保存、公開、目録案を提示する。その実際の作業計画と進行状況についても述べることにした。最後の節では、この幻灯史料が実際にどのようにかって用いられていたのか、どのような視聴者の

反応があったのかについて、述べることにした。なお、幻灯史料については論じる際の名称も「幻灯画」「幻灯板ガラス写真」、「スライド」、「Magic Lantern Slides」等さまざまである。幻灯の内容としては写真の場合もあれば絵を用いている場合もあり、また、様々な形で複写資料も作られているので支持体（ガラス板）名も特に用いず、ここでは、総称として「幻灯画像史料」と呼ぶことにした。もっとも基本的な形としては、幻灯に用いるためにガラス板に絵や写真を焼き付け、場合によっては彩色し、縁取り用の紙をはさんでもう一枚のガラス板ではさみ、縁を細い布で貼り付けるかたちをとっている。（図1）サイズは約80mm四方のものが多いが、80mm×100mmや30mm×30mmのような別のサイズのものも認められる。教育や娯楽素材として活用された他、明治期には輸出用の工芸品ともなっている。

幻灯画像史料についての研究は、必ずしも多いものではない。これには、まずその史料自体を体系的に、かつまとまった分量をもって提示する書物や場がないということが大きい。幻灯史へのアプローチは、岩本憲次（岩本 1995、1996）が行ってはいるが、その場合にも、幻灯についての明治期の解説書、雑誌記事が中心となっており、具体的な幻灯史料の内訳や実態については、自身の収集した範囲から推測するという記述となっている。幻灯の活動については、明治後期から大正期にかけて広く普及しており、木村（1949）は児童文化を概観しつつその流行のさまについてもふれているが、具体的な幻灯画像史料を今日俯瞰的に見渡すことができない。

幻灯は、絵や写真を多数の相手に向けて提示しつつ説明し、語るという形態からするなら、日本では中世以降広範に寺社でも行われることとなる「絵解き」とも共通する。また、風呂と呼ばれる桐製の幻灯機を用いて江戸時代から明治期まで行われていた「写し絵」とも共通する部分があることも指摘されている。（南 他 1982）。そして、それは映画や写真版印刷物の普及によって単純に衰退したとはいいがたい。同じく絵を提示しつつ語る「紙芝居」が、街角のメディアとして戦前、戦後を通して広範な享受者層をとらえていたように（山本 2000）、地域の娯楽を支えるとともに、明治期の教育、出版活動と深くかかわってきた（石附 1986）。しかしながら、上記のいずれのメディアにしる、活字出版物に比べて今日その実態の把握は難しいし、そもそも実物にも接し難いがために、いきおい活字化された史料をもとにして歴史や思想をめぐる議論がなされてしまう。だが、あくまで今日残っている印刷物によって近代の思考や認識を代表させ、議論している限り、具体的な情報の広がりや、実際にそれぞれの場で人々が接した情報の力、そこで作り上げられる思考のかたちはとらえきれない。だからこそ、現在これらのメディアの体系的な収集、整理、保存について考えるべきなのである。

今日、「絵解き」についてもそれを対象とする絵解き研究会が組織され「絵解き研究」が刊行されているし、「写し絵」についても劇団「みんな座」のように再現しようとする試みや、小林（1987）のような詳細な調査がなされている。しかしながら、ガラス板幻灯スライドに関してはその研究や情報交の場がきわめて少ないのが現状である。

その一方で、現在の情報機器は、幻灯をはじめとする視覚史料の保存と活用においては、非常に有用な環境を作り出してもいる。ここでガラス板幻灯史料の保存と活用についてのおおまかな見取り図をしめしておくなら、それらはまずデジタル化して複製を作ったうえで、それらを目録とともに印刷、または画面上で提供することとし、史料の現物は適切な保存環境で保管することが望ましい。また、各地に分散する所蔵情報を相互に交換し、その保存や複製化、共通する規格の目録作成の支援を行うべきだ。幻灯画像史料については、その目録の作成のしかたも定かではなく、また、保存のしかたについても同様である。したがってここでは、こうした点について具体的に論じることとした。

## 2. 幻灯画像史料の現状

この節では、具体的な保存や展示の事例にふれておく。というのも、どのような形での保存、目録化、展示がのぞましいのかについて考えるには、現在の状況を確認しておく必要があるからだ。保存や展示の現状について調査したのは幻灯画像史料を保存している以下の機関である。

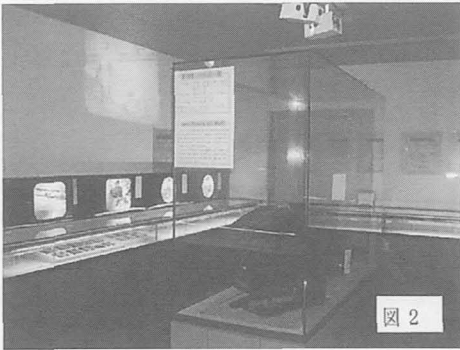
同一庵藍民芸館（新潟県柏崎市青海川 181）

日本力行会（練馬区小竹町 2-46-12）

宮田村教育委員会（長野県伊那郡宮田村）

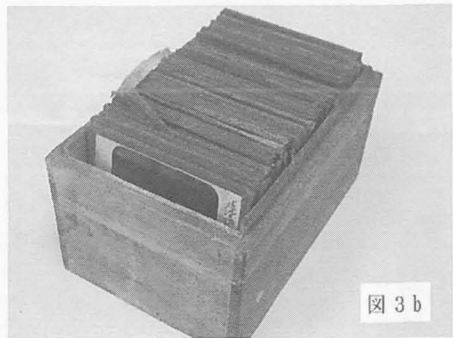
横浜開港資料館（横浜市中区日本大通 3）

早稲田大学演劇博物館（新宿区西早稲田 1-6-1）



まず同一庵藍民芸館だが、真宗浄興寺派正法寺で活用、収集されていた史料をもとに保存、展示されている。ここでの幻灯史料は同寺で実際に人を集めて話をする際に用いられていたものでもある。992 枚のガラス板幻灯史料を所蔵しており、その一部をガラスケースで展示し、いくつかのレプリカを自動の投影機を用いて室内に投影している。（図 2）目録は財産目録の状態

で、サイズと枚数、及び大まかな内容について記載されているのみである。複製されているのは一部分で、大部分のものについて保存について特に配慮はされていない。



日本力行会は、後でより細かく述べるが、明治期より海外移民を支援してきた機関であり、海外事情を紹介するための幻灯史料を所蔵している。179 枚の幻灯画像史料を保存している。展示はしていないが一般の公開にも応じており、現物がそのまま閲覧できる状態にある。保存に当ってはやはり特に配慮されてはおらず、もともと用いられていた木箱に入ったまま、書物とともに書庫に置かれていた。（図 3 a、b）目録は蔵書については一部

作成されているものの、幻灯史料に関しては作られていなかった。

宮田村教育委員会は、同村出身の幻灯師岸本與の親族が寄贈した史料である。752 枚あり、補修、展示、目録化がなされている。目録は番号、タイトル、内容、破損状況、サイズの項目で、それぞれさらに細かい記述レベル（画像内容と画像内に書かれている文字等）が設けられており、幻灯画像史料の目録作成例として参考になる。複製はなく、史料自体を補修（ガラス板、及び縁布）して、史料の展示、紹介に利用している。いくつかの木箱にそのまま入れて保存する方法をとっている。（図 4 a、b）



横浜開港資料館では、約 1000 枚の幻灯画像史料を所蔵している。目録は作られていないが、すべて複製写真が作られており、閲覧者は閉じられたその複製の写真を見るという形をとる。史料自体は温度湿度の調整のなされた保管庫に収められている。また、所蔵する幻灯史料についての情報とともに、その一部が刊行されている（横浜開港資料館編 1990）。早稲田大学演劇博物館は、現在確認されている幻灯用画像史料は 168 枚だが、現在整理中であり、正確な数は分からない。数は内部資料によるもので閲覧用の目録は作られておらず、一般公開はされていない。保管は温度 19 度、湿度 50 % の保管庫に置かれている。

こうした現状から分かるように、現在幻灯用画像史料は、公開されているが複製や保存が十分考慮されていないケース。保存環境がよく、複製は作られていても目録は作られていないケース、そもそも史料情報自体が不明なケース、と様々であり、保存や展示に関する方法も、機関のそれぞれの事情による制約もあるが、かなりまちまちである。また、保存に関する方法や目録の作成方法についても定まったものはない。では望ましい保存、整理、目録化、展示とはどういったものだろうか。これについては、現在その作業を行っている日本力行会の所蔵史料に則して、次節で述べることとする。

### 3. 幻灯画像史料の保存、公開、目録化

まず対象となる史料について説明しておく。財団法人日本力行会は、明治 30 年 1 月に

東京労働会として設立され、明治33年改称されている。十蔵寺宗雄（十蔵寺 1932）は「同会の学校を卒業したものは非常に多く、今や全世界に活動してゐるので、後輩の海外発展に非常な便利がある」としている。もとはキリスト教の立場から貧民救済を旨として設立され、労働の斡旋という側面から、海外への移民事業を支援してゆく。明治期には雑誌「救世」、「渡米新報」をそれぞれ五千部、「救世」一万部の他、『渡米案内』（1902）、『新渡航法』（1911）等を刊行している。（日本力行会 1946）現在では留学生の支援活動や在外日本人を含めた広い国際交流活動を行っている。（図5）

同会には、図書収蔵庫があり、許可を求めれば一般の閲覧も可能である。収蔵図書については「日本力行会発刊・所蔵 海外発展関係書籍および資料目録（1）」が出されている。これによれば、書籍や資料が約13000点所蔵されており、そのうちの1517点が目録に示されている。また、その後の目録化作業も継続しており、現在3623点の目録情報がインターネットを通して同会のホームページ上で公開されている。



ただし、幻灯画像資料はこの中にははいつてはいない。幻灯画像資料だけではなく、同会には明治期の写真類も多く残されてはいるが、目録化や保存についてはまだ手がつけられない状況にある。それらの保存を積極的に支援する目的のもとで、今回の幻灯画像資料の保存、整理作業を行っている。

さて、幻灯画像史料の望ましい保存、整理、目録化、展示について同会の史料をもとにプランを以下考えて行くこととする。幻灯画像史料は、多くはガラス板2枚によって作られており、それゆえに非常に破損し易い。購入した際には専用の木箱に入っているが、このままの保存は望ましくはない。例えば50枚が一組となってぎっしり縦置きに詰め込まれていれば、出し入れでガラス面に傷がつき、周囲の縁布も破損しやすい。また、箱が傾けばガラス板が互いの重さによって破損しかねない。もともとの使用によってばかりではなく、こうしたこともあって、実際にはひびが入ったり、縁布がとれてガラス一枚欠損してしまうケースも多い。

こうした保管による破損以外にも、むろん支持体（ガラス板）や画像自体の劣化も考えなくてはならない。幻灯画像史料自体についてのそうした報告はないが、これについては現在保存がすすめられているガラス乾板史料についての研究や（小林 1999）、写真保存全体についてなされた報告（日本写真学会画像保存研究会 1996）が参考になるだろう。ガラスに焼き付けられた銀塩モノクロ写真の画像は、画像物質の銀や染料の化学的劣化がおこるし、また、支持体のガラスも物理的劣化ばかりでなくかびなどの生物的劣化が起る。

既に史料によってはハイライト部分の画像が、薄れているケースや、染料自体の色が薄れているケースもある。したがってまずこれらに対しては複製の作成を優先することとし

た。透過原稿ユニットを用いたスキャナーでの複写を行い、すべてを 720dpi の jpeg ファイルとして保存することとした。さらに、それをもととして、デジタル処理を加えて汚れを除去し、見やすい画像にした補正版も同時に作成した。両者をプリントアウトすることで閲覧用の一覧を作成し。利用者にはそちらを展示することとし、特に必要でなければもとの資料は一般閲覧は控え、専用の保管箱に入れて保管することとした。

保管については、まず刷毛を用いてガラス板上の汚れを取り除き、さらにフィルムクリナーで汚れを取り除いた。保管箱は、ガラス乾板保存用に用いられている中性紙を使用した保管箱を用いることとした。箱にはアーカイバルボード (pH 8.5) 及び AF ハードボード (pH 8.5) を用い、箱内に仕切りを設けている。さらにそれぞれのガラス板を AF プロテクト H (pH 8.5) を用いたフォルダに収めることとした。なるべく現状の保存に心がけ、補修は最低限にとどめた。すなわち、ガラスが一枚欠損しているケース、及び周りを追おう縁布がほとんど落ちてガラス 2 枚が分離しかけているものについてである。これらは数は多くないが、同型のガラスを作成し、縁布は製本用テープを代用して補修を行った。補修を最低限にとどめたのは、例えば縁布の擦り切れ方によって、そのガラス板の使用頻度を推定することも可能であり、それ自体史料情報を含んでいるからである。例えば宮田村史料の場合、ジャンル別に幻灯史料が使用時点でおおまかに分けられており、さらにそのジャンルに応じて縁布が擦り切れている度合いが異なるため、頻繁に用いたセット、あまり利用されなかったセットを知ることが現在でも可能である。

整理と目録化は現在行っているが、基本的には分類は行わず、保管されていた順序に応じて通し番号をフォルダにふるることとした。実際には幻灯画像史料はセット販売となっており、内容からジャンルわけすることも比較的容易な場合も多いが、日本力行会所蔵史料は、既成のセットばかりではなく、当時の会長である永田稠の撮影した写真を利用して作成したものも多く、容易に分け難い。また、ここでの調査にかかわらず、部分的な幻灯画像史料が出てきたり、保管の過程で混在したり、といったことも考え合わせれば、無理に内容分類することは適切とも思えない。

目録の項目としては、「通し番号」「タイトル」「その他の記号」「種別」「内容」「内容詳細」「サイズ」「製造元」「破損状態」「補修の有無」を以下の要領で設けることとした。

- ・通し番号

最初に収納されていた順序に基づいて付した。それらは三つの箱と、納まりきらないものや破損したものが袋に入れて保存してあったため、通し番号によって入っていた場所を一括して示すこととした。

- ・タイトル

ガラス面の外に、筆で紙に書いたタイトルが付されたものも多く、それをタイトルとしてとった。タイトルのないものは特に何も記入しない。判読不能場合は○を用いた。

- ・タイトル補足

タイトルのないものについて、ごく大まかに風景、人物といった内容をつけた。細かくつけるに

は情報が不足しており、個々の記述内容もちぐはぐになるため、便宜的に大まかな内容を付した。

・内容詳細

タイトルをもとに、画像の中に写っているものや人が特定できる場合には記し、中に出てきている文字については「」として書き出すこととした。それ以外にも特に記述レベルを気にせず画像内容で参考になりそうなことはすべてここに書き入れることとした。これは何らかの語彙から検索する際の手がかりとするためである。

・種別

写真を焼き付けたものと、絵や図を焼き付けたもの、また彩色のあるものとないものがあるので、それが区別できるようにした。

・製造元

製造元がガラス面にはさんだ紙に印刷されているもの、いないものがあるので、それについて記した。同一の製造元でも表記の仕方が異なる場合は製造時期の違いとも考えられるのでそれも記した。ただし、破損したものについてははさまれた紙が失われている場合もあり、それによって製造元情報が記載されていない場合がある。

・その他の記号

タイトル以外に、番号が、やはりガラス面に、紙で頒布されているケースが多く、手書きのものど印刷された数値、あるいは両方があるもの、と種類が多く、利用した際の手がかりともなるため、タイトルとは別に、その番号（印刷された番号はpを付してそれがわかるようにした）を記録した。また、それ以外に多数にわたっての特徴（特定の形状のシールがはっている場合など）がある場合はそれを記入した。

・サイズ

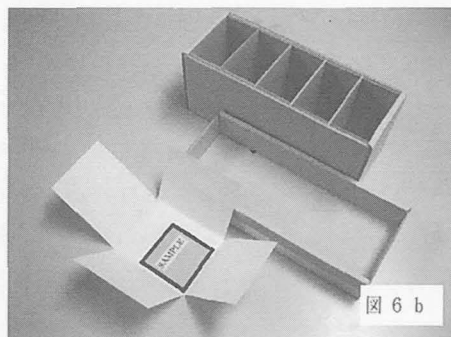
力行会所蔵の幻灯画像史料は、すべて82mm×82mmである。

・破損状態

破損状態をヒビが入っているもの、縁布が壊れているもの、おさえ用のガラスが欠落しているものの三つにわけて記した。

・補修情報

破損状態が特にひどく補修せざるを得なかったものについては、その補修を縁布の補修、おさえガラスの交換の二つにわけて記した。



基本的には幻灯画像史料は、デジタル化した複製化作業を行い、目録をとったのち、史料自体は保管し、特に要請があった場合にのみ公開するのが望ましい。(図6 a、b) デジタル化した場合の利点としては、その後の複製作業が簡便であること。そして画像の原史料にさわることなく容易に画像補正作業が行えること。(図7 a、b) また、容易に頒布、印刷可能であること等だが、さらに次のような点もあげられるだろう。

項目	日本	アメリカ
260768 千哩	7.2	3141491 千哩
7698 万人	1.4	11705 万人
440 億圓	7.15	7000 億圓
9275 哩	2.9	265530 哩
360 千噸	1.47	1769 千噸
64100 千圓	1.0	113000 千圓
30 千噸	1.7	50 千噸
25 万人	1.5	35 万人

項目	日本	アメリカ
260768 千哩	7.2	3141491 千哩
7698 万人	1.4	11705 万人
440 億圓	7.15	7000 億圓
9275 哩	2.9	265530 哩
360 千噸	1.47	1769 千噸
64100 千圓	1.0	113000 千圓
30 千噸	1.7	50 千噸
25 万人	1.5	35 万人

こうした史料を所蔵している機関は、これら史料を用いた催しを行うことも少なくない。例えば宮田村では現在でも当時の幻灯機を用いた映写会を催してもいる。そうした場合にも、デジタル史料であれば、公開も容易である。液晶プロジェクターを用いて画像を映し出す、あるいは OHP フィルムに印刷して投影する、デジタルカメラから大型のテレビに出力する、等といった多様な形で映写活動を場所や機材に応じて容易に行うことができる。

#### 4. 使用の実態

最後のこの節では、この幻灯画像史料が実際にどのように使われていたのか、どのような視聴者の反応があったのかについて、述べることにした。横浜開港資料館や早稲田大学演劇博物館のように、いくつかの個所から寄贈を受けたり、購入したり、といったかたちで収集された場合もあるが、今回ふれた中でも宮田村教育委員会、日本力行会、同一庵藍民芸館の事例は、むしろ実際に使用していた個人または機関が、そのまとまりをもって保存してきているという意味で非常に貴重である。というのも、そうしたケースでは、具体的にどのようにそれらが使われていたのか、という情報をも同時に手に入れることができるからだ。

例えば同一庵藍民芸館の現館長である松田秀明氏によれば、子どもの頃、もと所蔵していた正法寺の住職（松田氏の父親にあたる）が実際にそれを寺で見せていた光景を記憶していた。また、宮田村でも、村の催しとして幻灯を再現する会を行った際に、実際にかつて見た人々がまだ複数存命であることが確認されている。なお、宮田村の幻灯師である岸本興についてはその伝記とともに当時の幻灯の実態をうかがう試みも既にある（桐山



1989)。

ここで対象とした日本力行会の史料に関して言えば、実際に使用しているのを見た人々が存命しているというわけではないが、それを映写したり、見たりした人々の言葉が活字として数多く残されているという意味で特異である。それは、この幻灯画像史料が、移民への啓蒙活動に用いられたからであり、移民に関する記録を当時から様々な印刷物を通して残してきている日本力行会の刊行物をはじめとして、移民というテーマのもとに記録された史料が少なくないからである。

全くの昼夜兼行で、交通の許す限り、午前と午後と夜間と一日三回の講演をした所もあり、昼は講演夜は幻灯に依つて、耳からの外眼から海外の実行を知らせることに苦心したし、又所に依つては午前は小学校の生徒に、昼食の時間は町村役場吏員に、午後は青年会又は婦人会に、夜間は幻灯によつて一般大衆に、一村に一日を費し四回の講演をした特に地方の婦人は昼間の集会には出ないが、夜間而かも幻灯だと、平生着のままで、手拭いでも被つて出られるので、多くの聴衆が得られた(日本力行会 1946) こうした幻灯会の盛況の様は、当時の日本力行会の会誌「力行世界」からもうかがわれるが、『日本力行会創立五十年史』には、会長の永田稠が大正五年、四十日間にわたって行った関西から九州方面で講演活動が記されている。

先に引用したのは大正四年前後の長野県の状況であり、講演者は日本力行会会長の永田稠である。彼は同書で「長野県下で二百五十回以上の講演をなし、その聴衆は十五万人に達した」とし、また別の書で「海外発展の講演会、幻灯会、活動写真会、印刷物、出版物等が限りなく当時の信州に活動した」と述べて「一回の聴講者は少ない時で二百人、多い時には三千人を越へた」「平均五百人とすれば信州百八十万の人口の内、約十二万五千が私の講演を聴いた筈」としている。婦人会や青年会といった地域集団に訴えかけつつ、気軽に楽しみに出かけることのできる地域イベントという形をとっていることがうかがえよう。

こうした移民に関する幻灯会は長野県においては、信濃教育会の移殖民幻灯講演会、信濃海外協会の海外発展講習会、あるいは郡教育部会や青年団が主催した講演会という形で行われている。例えば信濃教育会の機関紙「信濃教育」には「信濃教育会主唱に係る移殖民幻灯講演会」で「下高井各郡各町村の開催状況は左の如し」として、以下の数値が示されている(信濃教育会 1917)。

十一月	九日	晴	平野学校	七百名
同	十日	同	穂高等学校	七百名
同	十一日	同	戸立岩分教場	二百五十名
同	十二日	同	柏尾学校	四百名
同	十三日	同	上木島学校	八百名
同	十四日	同	倭学校	八百名
同	十五日	同	平岡学校	一千名

同	十六日	同	中野学校	八百名
同	十七日	同	往郷学校	九百名
同	十八日	同	日野学校	七百名
同	十九日	同	夜間瀬学校	七百名
同	二十日	同	穂波学校	七百名
同	二十一日	同	平穂学校	六百名
同	二十二日	同	長丘村七瀬区	四百名
同	二十三日	同	高丘学校	六百名

聴衆総計 一万五十名

そしてそれらが、一部の選ばれた読者層ではなく、地域の幅広い層の人々を動員していたことは先の資料でも触れた。では、実際にそれらの幻灯会の反応はどうだったのだろうか。

信濃海外協会の会誌である「海の外」には、「話すものも聞くものも皆白熱」していたとし、講習会をきっかけに南佐久、更級、上高井、南安曇、下伊那等、各地に海外協会の支部設立の相談が進み始めたことを触れられている（信濃海外協会 1922）。また、『信州人の海外発展』（永田 1973）には北安曇郡視学の中村国穂が学校を訪れて講堂で行った講演によってブラジルへの「海外熱」にとりつかれたり、村の青年会で永田の講演を聴いて力行会に入会、移民したケースや、更埴郡長の津崎尚武の講演に感激した人々の文章が実名で掲載されており、実際に海外渡航へとつながっていたことが分かる。

すなわち、海外渡航への呼びかけ、あるいはそこに働いたメディアの効力を考える際にも、単に中央の出版物対読者の関係ではなく、こうした地域メディアの効果が極めて大きかったはずであり、これら地域情報の流れ、広がりの中から、当時の様々な表象も作り上げられていたはずなのだ。幻灯史料は、いわば中央の、上からの情報として歴史を考え、調査するのではなく、具体的な地域という場で、再生産され流通する情報のかたちを読み解いて行くための貴重な素材にほかならない。

## 参考文献

- 金沢巖『写真及幻灯』（博文館、1899・5）  
 信濃教育会「移植民幻灯講演会」（『信濃教育』1917・12）  
 信濃海外協会「雑報 海外発展講習会」（『海の外』1922・4）  
 十蔵寺宗雄『渡航案内』（東方書院、1932・9）  
 日本力行会『日本力行会創立五十年史』（日本力行会、1946・11）  
 木村孤舟『明治少年文化史話』（童話春秋社、1949・5、大空社 95・2 復刻）  
 永田稗『信州人の海外発展』（日本力行会、1973・2）  
 南博、永井啓夫、小沢昭一編『えとく』（白水社、1982・6）  
 石附実『教育博物館と明治の子ども』（福村出版、1986・12）  
 小林源次郎『写し絵』（中央大学出版部、1987・3）

- 桐山実夫『幻灯の炎よ永遠に』（信濃教育会出版部、1989・7）
- 横浜開港資料館編『彩色アルバム 明治の日本』（有隣堂、1990・3）
- 宮田村教育委員会「幻灯画目録」（宮田村教育委員会、1992・12）
- 岩本憲児「比較幻灯史考 日本編・明治期 上」（『日本の美学』1995・9）
- 日本写真学会画像保存研究会編『写真の保存・展示・修復』（武蔵野クリエイト、1996・5）
- 岩本憲児「比較幻灯史考 日本編・明治期 下」（『日本の美学』1996・9）
- 日本力行会『海外発展関係書籍および資料目録集（1）』（日本力行会、1997・5）
- 小林聡「ガラス乾板の收藏調査と保護対策」（『東京大学史料編纂所研究紀要』1999・3）
- 岩本憲児「幻灯から映画へ」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』2000・2）
- 山本武利『紙芝居』（吉川弘文館、2000・10）
- 同一庵藍民芸館『藍民芸館五年史』（同一庵藍民芸館、2001・3） （2001・12 稿）

〈付記〉今回の調査は、日本力行会、宮田村教育委員会、及び同一庵藍民芸館の各機関の協力のもとに行われた。この場をかりてお礼申し上げたい。なお、本稿は国文学研究資料館史料館主催平成 13 年度史料管理学研修会（短期）研修レポートとして作成、提出した原稿に手を入れたものである。また、本稿作成後、岩本憲次『幻燈の世紀』（森話社、2002・2）が刊行され、そこにおいて近世から近代にかけての幻燈の移入状況が、西欧の幻灯史とともに詳細にふれられている点をつけくわえておきたい。